

中世後半 Coventry の経済発展

出 羽 秀 明

The Economic Development of Coventry during the later middle ages

Hideaki Dewa

(一)

アングロ・サクソン時代、イングランド中部の Sherbourne 河に沿って一つの集落が形成された。彼らは深い森と重い粘土質の土壤に覆われた不毛の地を開墾し、そこを定住の地とした。アングロ・サクソン時代の Coventry は取るに足りない、小さな集落であったがそこにあった女子修道院はわずかながら人々に交易の機会を提供していた。しかし、その修道院は1016年にデーン人の襲撃を受けて破壊され、その後の1043年頃 Sherbourne 河を望む丘陵の中腹に、領主 Leofric, Earl of Mercia とその妻 Godiva によってベネディクト派の修道院が建てられた。Coventry はこの修道院の創設によって成長を促されたとは云え、ドゥームズデイの時代までは未開の村落のままであった。その時代 Coventry は領主直領地に23の黎隊をもっていたが、耕地は狭く 5 hides しかなかった。住民は50人の土地保有農 (villeins)、12人の小屋住農 (bordars)、7人の農奴 (serfs) より構成されており、人口は最大でも69世帯、350人を超えることはなかった¹⁾。このイングランドの中央に位置した小規模の農村村落は、14・5世紀に他の多くの都市が厳しい衰退を経験するさなか、14世紀末には York, Bristol に次ぐ位置にまで発展、15世紀始めの人口はほぼ1万人を数え、イングランド全域に影響力をもつ地方の首都 (provincial capital) の1つとして数えられるようになった。イングランドにおける14世紀後半から15世紀前半にかけての1世紀は、人口のほぼ1/3が死亡したと言われる疫病と飢饉、内乱と対外戦争の戦火に見舞われた「全般的後退の時代」であった²⁾。

本稿は、こうした全般的後退の時代にあって、なぜ Coventry が発展を遂げたのかを、経済的側面より跡付けることを試みたものである。

注

- 1) Victoria County History, Warwick, Vol. VIII p. 4 (London, 1969); ドゥムズデイ (1086年) 時代の家族規模を平均4.5人～5人として、農奴をも世帯を持つものとするれば最大69世帯・345人、農奴を住み込みとするれば最小62世帯・279人の規模となる。当時のイングランドの総人口は約29万世帯・125～138万人とされる。Lincoln, Norwich は約6000人、Gloucester は約3000人の人口を有した。例えば、J. C. Russell, *British Medieval Population* (Albuquerque, 1948) p. 54; J. Hatcher and E. Miller, *Medieval England: Rural Society and Economic Changes, 1086–1348* (London, 1978) p. 29
- 2) M. M. Postan, *The Fifteenth Century, Economic History Review*, vol. IX, no. 2 (1939)

(二)

12・3世紀における Coventry は、14世紀半ばからの拡大への胎動期であった。と云うのは、それまでの単なる地方の小農村としての存在を脱し、13世紀の後半までには著しく社会的分業が進み、都市的性格を整えていったからである。

12世紀初頭 Coventry は、北半分の修道院長領 (Prior's Half) と南半分の伯爵領 (Earl's Half) の2つの Halves に分割・支配されることになり、市場・司法権をめぐる両領の間でしばしば争いがあった。このことは Coventry の歴史を極めて複雑なものとし、同時に Coventry の経済発展を甚だしく妨げた。

13世紀初めにはほとんどの主要道路が敷かれていた¹⁾。伯爵領の中心道路 Earl 通りの周辺には染色工、絹物商、織布工が、そして13世紀後半には商人を含む富裕な人々が居住していた。羊毛商人 Richard de la Muyre を始め Richard de Weston, John de Langeleye, William de Schepeye らはこの地域に住んでいた著名な商人達であった。その他この地域にはブローチ職人、塗装職人、パン焼き職人がいた。Earl 通りの家屋の多くは、John Sley の刃物店のよう、店舗や仕事場が道路に面して設けられていた。1307年に William Gamel が購入した家屋には2つの店舗が付いていた²⁾。Earl 通りの東 Gosford 通り周辺には13世紀前半錠前職人など金属業に関連した職人が多かったが、その他、石工、大工、織布工、毛織物商などもいた。Much Park 通りと Earl's Mill 小路にはブローチ職人、鏡製造工、ガラス職人、革帯職人、また鍛冶屋や刃物工など金属業に関係する人々も多かった。14世紀初頭にガラス職人 William が Much Park 通りで居酒屋を開いていた³⁾。この時期 Coventry は石鹼製造で有名であり、1230年代末から1240年代初めにかけて、Earl 通りとの交差点にある地下貯蔵庫の隣には石鹼製造職人 Geoffrey の娘たちが住んでいたとの記録がある⁴⁾。Little Park 通りには刃物工、絹物縫製職人、財布製造職人、石切工、そして鞆製造職人 Geoffrey の息子 William が住んでいた⁵⁾。Cheylesmore 小路周辺には金細工師や鞍師が多数居住していた。13世紀末弓術師の Philip は Margery と結婚しここに住んだ⁶⁾。聖 Michael 教会前の Bayley 小路沿いには石造りの家屋があり、John Minot は地下貯蔵庫のある石造りの家を年16s. で借りた⁷⁾。Earl 通りから西に延びる Smithford 通りの周辺には、鍛冶屋、水車大工、そして織布工や剪毛工など多くの毛織物職人がいた。13世紀初

め染色工 Osbert は縮絨工 Edwin が以前住んでいた土地を購入した⁸⁾。Smithford 通りからさらに西の Spon 通りには織布工、染色工の他、皮革業に携わる者が多かった。

Coventry 北部の修道院長領の中心道路は、かつて「司教大通り」と呼ばれた Bishop 通りであった。Bishop 通りは南へは Ironmonger 街、Cross Cheaping を経て聖 Trinity 教会へ、そして北は沿道に聖 Nicholas 教会のある St. Nicholas 通りに通じていた。Ironmonger 街と Cross Cheaping および West Orchard が交差する区域では市場が開かれていた。ここでは魚、パン、鉄、穀物が販売されており、Cross Cheaping は、もとは「穀物市場」と呼ばれた通りであった。1210から20年頃 William Midnit はこの区域に店舗を構えていたが、後には William de Franketon の所有になった。1250年代初め Richard de Fonte は Simon le Bocmonger から屋台を購入した。その両隣には Ralf の息子 Nicholas と Walter Trot の屋台があった⁹⁾。修道院領では、慣習によって認められた週市と歳市が開かれていた。週市は毎週金曜日に、歳市は1227年に St. Leger's Day (10月2日) に続く8日間の開催を国王から認められていた¹⁰⁾。羊毛は Rood 街と Cook 通りの交差点で、毛織物は Palmer 街の角の「the old Drapery」で販売された。修道院長は14世紀初め伯爵領の住民 Richard le Mercer ら24人を週市以外の場所と曜日に、毛織物、セングル織物、香辛料、絹などの取引を行なったとして民事裁判所に訴えた。裁判の結果、彼らは £60の損害賠償金の支払いを命じられ、以後週市以外での取引を禁止された¹¹⁾。北西の郊外 Dead 小路近隣には13世紀前半布張り場 (tenter yards) があり、そこにあった水車はおそらく毛織物用の縮絨水車であったと思われる。Well 通りには、皮革業に関連したタン鞣工、靴工、皮革商、肉屋が多数住んでいた。その他塩商、オイル商がいたが彼らの扱う商品は皮革業に関係していた。Bishop 通りと Cook 通りの交差点にはパン焼場があり、この周辺には多くのパン焼き職人、料理人、製粉職人が住んでいた。聖 Nicholas 教会に向う Bishop 通りの北の区域には織布工、縮絨工、鍛冶屋、蹄鉄工、大工、石工、ろくろ職人、桶職人、羊皮紙職人など多種の職業に就いていた人々がいた。

以上、12・3世紀の Coventry を概観してきた。社会的分業が進展し、その住民の多数が非農業的職業に従事し、それを主たる生計の糧としていた¹²⁾。その職種は織布・縫製、食料、皮革、金属、建築、商業など極めて多岐に渡った。

食料関係部門では、11人の肉屋、16人の料理人、13人のブドウ酒商、5人の魚商、その1人は鮭魚商がいたが、とりわけ製粉職人とパン焼き職人が多く、それぞれ20人を越えた。その他醸造職人・塩商がいたが、この時代の醸造は多くの人々にとって副次的な職業であり、ブローチ職人 Richard は醸造用の器具を所有していた¹³⁾。

皮革関係部門では、30人を越えるタン鞣工と鞍師の他、靴・財布・手袋製造職人がそれぞれ6・9・2人おり、毛皮商は5人を数えた。

金属関係部門では、鍛冶屋がその中心であり、金細工師、鉛細工職人、革帯職人、刃物商の他に18人の錠前工、11人のブローチ職人、2人の鏡製造工がいた。

建築関係部門では、大工・塗装職人・石工がそれぞれ12・8・6人いたが、当時石造りの家は稀であったため、石工はもっぱら教会や市壁の建築・修理に携わった。

織布・縫製関係部門では、織布工・染色工がそれぞれ少なくとも28・15人、5人の縮絨工、8人の梳毛工、12人の洋服仕立商の他にキャップ帽製造工、毛布製布工、絹物縫製職人などがいた。織布縫製関係部門に携わった者は他の部門に比べてかなりの数にのぼり、12・3世紀を通じて Coventry では毛織物工業が成長しつつあった事をうかがうことができる。13世紀の後半までには7人の毛織物商がおり、Coventry 最初の教会付祈願所は、1291年に毛織物商によって設置された。

商業関係部門では30人を越える商人の他に、少なくとも7人の絹物商がいた。しかしこの時代、商人は多種類の商品を取り扱ったのでその区分はあいまいであった。彼らは時には羊毛商、毛織物商、ブドウ酒商、皮革商、食料雑貨商、絹物商であり、時にはそれらすべてを取り扱った。また、規模も呼び売り商人の類いから海外貿易に携わった商人まで多岐に渡った¹⁴⁾ 専門化がより一般的になったのは14世紀以降であり、これら商人達の何人かが羊毛輸出に携わるようになるのは次の時代であった。

その他 Coventry には8人の桶職人、5人の水車大工、5人の羊皮紙職人、4人のろくろ職人、3人の弓矢製造職人、14人の運搬夫がいた。こうした著しい社会的分業の進展と並行して、「市民」の呼称もこの時期に用いられ始めていた。1250年代末から1270年代初めにかけて何人かの市民がおり、社会的な身分や地位の区別がより明確にされつつあった¹⁵⁾ 当時の Coventry は、地域の中心として経済的にも発展の兆しが見られたので、住民のなかには多くの移住者がいた。12世紀半ばに Earl Ranalf II 世は取引のために Coventry にやって来る商人の安全を約束するとともに、税金の免除をし、商人の移住を奨励した¹⁶⁾ 移住者は周辺の村々、同州内の小都市、あるいは近隣の州からやって来たが、彼らは出身地から完全に切り離されることを望まず、自分の出身地名を「姓」とした。13世紀末には地名を姓とする者が住民の1/4を越えた¹⁷⁾ 羊毛商人 Hugh de Merington は、Adam Attegreence の娘 Agnes との結婚により、また William Gramtpe は1280年代に父とともに Coventry に移住した¹⁸⁾ その他 Richard le Brocher の娘 Alice と結婚し Earl 通りに住んだ Richard de la Muyre や John de Rydeware, John de Langley ら、著名な商人も移住者であった¹⁹⁾ 1280年の Hundred Rolls によれば、Coventry にはほぼ900軒の家屋があり、人口は4,400人から最大5,600人と推定された²⁰⁾ この時期 Coventry は着実に繁栄の基礎を固めつつあったとは云え、イングランドの地方都市の中ではいまだ小規模の部類に属していた。

注

- 1) 以下の記述は主として、12・3世紀に残された土地譲渡証書 (Deeds) によるものである。P. R. Coss, *The Early Records of Medieval Coventry* (London, 1986) [Records of Social and Economic History, new series XI]

- 2) P. R. Coss, *ibid.*, pp. 124, 136, 141, 142, 149, 150
- 3) P. R. Coss, *ibid.*, p. 114
- 4) P. R. Coss, *ibid.*, p. 103, 13世紀末 Prior's Half の Dead 小路に石鹼製造工 Thomas of Grantham が住んでいた。P. R. Coss, *ibid.*, p. 117
- 5) P. R. Coss, *ibid.*, p. 86
- 6) P. R. Coss, *ibid.*, p. 80
- 7) P. R. Coss, *ibid.*, p. 74;1308年
- 8) P. R. Coss, *ibid.*, p. 194
- 9) P. R. Coss, *ibid.*, pp. 48, 52, 306, 307, 308, 311, 315; 小麦, えん麦, えんどう豆が15世紀初頭 West Orchard で販売されていた。M. Dormer Harris (ed.), *The Coventry Leet Book, Early English Text Society, original series*, pp. 27, 59 (London, 1907–13), 以下 Leet Book と略記。Ironmonger 街には多くの鍛冶屋が住んでいた。P. R. Coss, *ibid.*, pp. 303, 310
- 10) V. C. H., p. 151 12年後歳市は St. George's Day (4月23日) に移った。
- 11) P. R. Coss, *ibid.*, pp. 43–46; Prior の訴訟はこの時だけではなく, 1307年には67人を訴えた。羊毛商人 Hugh de Merington がその中にいた。
- 12) もちろん, この時代農業的色彩は色濃く残されていた。例えば, 1230年代末から1240年代初め John le Flecher が Pilip de Winchcombe に「牧草地での放牧権と Cheylesmore から Spon 橋への小道に沿った牧草地の中を家畜と荷車が自由に通る権利を譲った」との記述はそれを物語る。P. R. Coss, *ibid.*, p. 212
- 13) P. R. Coss, *ibid.*, p. 184
- 14) 例えば, G. Unwin, *The Gilds and Companies of London*, (London, 1925) p. 58
- 15) 1250年代末から1260年代初め Robert de Chilton が, 1260年代末から1270年代初め John de Lodelawe, Reginald de Catesby が市民 (burgess) と記述された。P. R. Coss, *ibid.*, pp. 162, 228, 305
- 16) P. R. Coss, *ibid.*, p. 18 この特許状は1182年 Henry 2 世によって追認された。
- 17) Warwicks. 内の Allesley, Bermingham, Coleshill, Warwick, Kenilworth, Kineton, Kidderminster, Evesham など, 他の州の Lincolns., Berks., Leicesters., Oxfords. など, そしておそらく London からの移住者がいた。P. R. Coss, *ibid.*, pp. 125, 292, 141, 299, 100, 187, 257
- 18) P. R. Coss, *ibid.*, pp. 136, 296
- 19) P. R. Coss, *ibid.*, p. 136
- 20) T. John, *The Hundred Rolls of 1280, The Early Records of Medieval Coventry*, pp. 365–394: 郡別検地帳は Edward I 世が行なった全国的な国民調査の史料で, 現存するのは中部イングランド数州分。

(三)

14世紀半ばからの Coventry の拡大は, 毛織物工業の発展と市場中心地としての機能の増大によるものであった。

前項で見てきたように, Coventry では12・3世紀を通じて社会的分業が著しく進展し, 職種は毛織物, 皮革, 金属, 食料部門など60を越えた。その中でも特に, 毛織物工業が中心的産業として確立されつつあった。他方, 商取引に携わる多数の商人がおり, 彼らの中から13世紀中期以降主として羊毛取引に従事する羊毛商人 (wool merchant) が出現していた。羊毛商人は13世紀末から14世紀半ばにかけて活発な貿易活動を営み, Coventry に多額の利益をもたら

した。この羊毛取引による利益は14世紀後半以降 Coventry の経済発展の礎となった。

周知のように、13世紀末から14世紀半ばにかけてイングランドの羊毛輸出は急激に拡大し、羊毛はまさに「イングランド王国の至高の財・宝」であった¹⁾。

この時期 Coventry の多くの商人も羊毛取引に携わっており、Thomas de Fakenham は、多額の借金を残したまま1285年以前に死亡したが、その借金の中に毛織物工業都市フローレンスの商人への60marks が含まれていた。また、彼の遺言執行人の1人 Roger le Chamberlain は1275年に20sacks の羊毛輸出許可証を与えられていた²⁾。14世紀初めに Earl 通りには Radulphus le Hunte, Hugh de Merynton ら多くの羊毛商人が住んでおり、Hugh de Merynton は妻 Agnes と14世紀半ば以降 Coventry で指導的役割を担うことになる Merynton 家を築いた³⁾。Coventry の羊毛商人の多くは14世紀20年代から開かれた「羊毛商人の集会」に召集された。1322年にステーブルの設置を論ずるため York で開かれた集会には、Hamo Totyng の他に前述の商人を含めて Coventry の羊毛商人13人が召集された⁴⁾。羊毛商人の集会は、イングランドの羊毛貿易が一連の構造的危機に陥った1337年から57年の間に16回開かれたが、そのうち Jordan de Shephey は11回、Thomas de Toltham は8回召集された。Jordan de Shephey は、1338年頃 Dordrecht へ222sacks 余りの羊毛を輸出した Coventry の第2代の市長であったが、任期途中で黒死病で死んだ⁵⁾。この時、Thomas de Toltham ら7人の Coventry 商人も羊毛を輸出した。Coventry 商人たちはその輸出港として主に London, そして時には Boston 港を使った。1338年に Dordrecht で国王に没収された羊毛の中に10人の Coventry 商人のものが含まれていたが、彼らの中で Jordan de Shephey は London と Boston, Roger de Bray は Boston, その他の者は London から羊毛を船積みしていた⁶⁾。1338年から39年の冬に羊毛320sacks が Coventry から Boston まで、ほぼ96miles のみちのりを総経費 £103 4s. 6p. かけて運ばれた⁷⁾。London や Boston から積み出された羊毛は、低地地方へ向かった。1326年に Thomas de Toltham, Thomas atte Mire, Richard atte Grene らの羊毛を積んだ船が Brabant へ向かう途中に拿捕され、1344年には Robert de Shepey らの羊毛を積んで Bruges へ向かっていた船が海賊に襲撃された。そして1352年に Flanders へ向かう船が Kent の沖で難破したが、この船には Richard Stoke ら Coventry 商人の羊毛が積み込まれていた⁸⁾。

1363年以降イングランドの羊毛はステーブル都市 Calais に集められた。Sherbourne 河にかかる Gosford 橋が Dover と、その近くの建物が Calais と呼ばれたことは当時 Calais と Coventry の間に緊密な結び付きがあったことを物語っている。John Onley は、1396・1417年に Coventry の市長を、そして1400年に Calais の市長を勤めた羊毛商人で、彼は Edward 三世が Calais を接收した後にそこで生まれた最初のイングランド人であったと言われる。また、Trinity ギルドの会員の中に Calais の市民が含まれていた⁹⁾。

この時期羊毛商人達は、都市の指導者層を形成し極めて大きな影響力をもっていた。初代市長の John de Warde を初めとして Edward 三世治世の後半、市長職はほとんど羊毛商人によっ

て占められた。¹⁰⁾ 1359・63・65年, 1373・77・85年に市長を勤めた William と Adam は, 羊毛取引によって身代を築いた Botoner 家のメンバーで, 彼らは代々聖 Michael 教会の建設に関わった。¹¹⁾ 1327年と1332年の臨時税 (Lay Subsidy) の支払い者の中に多くの羊毛商人の名前がみられている。1332年には合計135人によって総額 £47 2s. 1/2d. が支払われたが, この中で £3 6s. 8p. を割り当てられた Laurence de Shepeye は, 1327年に聖 Michael 教会に隣接する土地を, その後3年以内に聖 Laurence 教会の司祭に土地と店舗を寄進した。彼は Coventry 以外に Warwick, Drayton, Alcester, Stratford などに土地を所有した。¹²⁾ 13世紀末から14世紀前半にかけて活躍した羊毛商人たちの或る者は地主になり, 或る者は羊毛取引を続けたが, 多くは14世紀半ば以降, イングランドの貿易商品の大宗が羊毛から毛織物に転換するのに伴って毛織物取引に移行していった。¹³⁾

1332年に Warwickshire で規模と富において最大の都市となっていた Coventry は, 1334年には富において Cambridge を上まわり, Gloucester, Southampton に匹敵するまでに成長し, イングランドの地方都市の中で19番目にランクされた。¹⁴⁾

毛織物工業は中世後半において多くの都市にとって盛衰を左右する鍵であった。York, Lincoln など, かつて毛織物工業によって繁栄した多くの都市が, 周辺の農村における毛織物工業の勃興により繁栄の基盤を侵蝕され衰退していった。Gloucester はベストで厳しい打撃を蒙ったにもかかわらず, 毛織物工業の発展によって衰退を免れ, また15世紀末からの Lavenham, Totnes の劇的な繁栄も毛織物工業の発展によるものであった。Coventry は Leicester や Nottingham などと異なり羊毛から毛織物へ順調に移行・発展することができた。

Coventry の毛織物は古くから有名であり, 「コヴェントリー・ブルー」の名は広く海外でも知られていた。14世紀から15世紀初めにかけて住民の30%近くが毛織物業に関連した職業に就いており, 織布工・染色工・縮絨工はそれぞれ30・40・20人を越えた。毛織物商は50人近くいたし, おそらく羊毛や毛織物を扱った商人は100人を越えていたものと思われる。この時期皮革・金属業に関係した職業に就いていた者はそれぞれ約15・11%であった。Warwickshire の毛織物検査官の報告書 (Aulnage Accounts) は, この時期 Coventry が毛織物の製造と販売の中心地であったことを明らかにする。報告書によれば1397/8年と1405年/6年 Coventry 市場ではそれぞれ 3,105 3/4 ・ 1,108 1/2 cloths が取り扱われた。¹⁵⁾ この毛織物の大半は Coventry で製造されたものであったが, 中には近隣の農村や小都市, さらに遠隔の地域からもたらされたものも含まれていた。毛織物を販売した人々の全てが織布工, 染色工, もしくは毛織物商など毛織物を専業とする人々ではなかった。肉屋, 魚商, パン屋, 鉄器商など毛織物製造を副業とした多くの人々がおり, 彼らの多くは Trinity ギルドの会員で, その中には著名な市民も含まれていた。かの羊毛商人 John Onley を始め Richard Doddenhale など市長の職に就いた者もかなりいた。1405/6年にダズン織を販売した John Leder は, 1421・37年に市長をそして1424年に Trinity ギルドの組合長を勤めた毛織物商であった。多量の毛織物を扱った

Roger Benet, Ralph Lodyngton, William Southam らは、チュダー期に毛織物工業において重要な役割を担うことになった織元の先駆けとなった人々であった。¹⁶⁾ また、羊毛商人も毛織物取引に携わっており、14世紀90年代に法令に反して羊毛を購入したため罪に問われた Richard Clerk, Philip Baron, Richard Dodenhall ら羊毛商人の名が報告書に見られる。その中の1人 William Happesford は、14世紀末 William Warde ら染色工にお金を貸していた。¹⁷⁾ 毛織物を市場で販売した人々の中にはこうした著名な市民や Trinity ギルドの会員の他に多くの女性が含まれ、1397/8年に23人、そして1405/6年には27人を数えた。この時期 Coventry は、州内における他の毛織物市場都市とは比較にならない程多くの毛織物を取り扱っていた。同じ時期 Coventry に次いで2番目に多くの毛織物を扱った Birmingham では、僅か44cloths が販売されたにすぎなかった。¹⁸⁾ Coventry における毛織物の販売は14・5世紀にかけて「the new Drapery」以外の場所では禁止されるようになった。「the new Drapery」は、それまでの Palmer 街にあった「the old Drapery」に代わって、1351年までには Bayley 街に設立されていた。Coventry ではすでに13世紀前半から毛織物販売が行なわれており、14世紀にはアイルランドやイングランドの遠隔の地域からももたらされ、1355年にアイルランド、Devon, Cornwall の毛織物の販売を「the new Drapery」に限定するとの条例が作成された。そして1425年には毛織物の販売が市場日の金曜日に「the new Drapery」においてのみ認められることとなり、他の日に、他の場所で販売することは禁止された。違反した場合には £10もの料金を課された。¹⁹⁾

1449年に Coventry の防御のために具足を寄付した人々のリストによれば、合計603人のうち織布工が57人、染色工が37人、縮絨工が28人、剪毛工と洋服仕立商が64人、そして毛織物商が59人いた。これら毛織物業に関係した職種に就いていた人々は合計244人、全体の40.5%にのぼった。皮革・金属業に従事した者はそれぞれ83・126人、13.8・20.9%であった。²⁰⁾ 15世紀半ば Coventry における毛織物工業の隆盛は毛織物商の勢力の強大さに反映され、59人の毛織物商のうち都市の役職に就いた者は16人、そのうちの6人は市長、6人は執行役 (Bailiff) を勤めた。

原料羊毛の重要な供給者は修道院であった。都市の周りの牧草地に群れる修道院の羊は1480年に400頭を教え、近隣の Combe, Stoneleigh, Merevale のシトー修道会の僧院から刈り込み羊毛が送られた。1365年に Combe の僧院長は Richard de Stoke と Richard de Buffre に42sacks の羊毛代金80marks の負債を認めた。²¹⁾ おそらくイングランドの中心的羊毛生産地域 the Cotswold から羊毛がもたらされた。Trinityギルドの会員の中に「全イングランドの羊毛商人の華」と云われた Chipping Campden の William Grevill がいた。²²⁾ Coventry の18miles 東の Misterton の Poultney の所領では16世紀においても Coventry の織布工や織元に羊毛を供給していた。

大青 (woad) は青色染料としてばかりではなく媒染剤としても用いられ、毛織物工業にとって欠かすことのできないものであった。1420年代後半から1478年にかけて、多量の大青が Southampton を通じて Coventry にもたらされた。大青は古くから Coventry で使用されていた

らしく、1247年に Geoffrey Hildelay は大青を運搬中に首の骨を折って死亡したとの記録がある。²³⁾ Southampton から陸路 Coventry に運ばれた大青は1443/4・1460/1・1465/6年に他の年の150~250balets を大きく上回り、それぞれ631・695・641balets を記録した。1439/40年の Southampton の Brokage 帳簿によれば、この取引を担ったのは毛織物商、染色工、絹物商らほとんど Coventry の人々で、彼らは羊毛、毛織物、スズなどを Southampton に運び、大青、あかね染料、みょうばん、オイル、ぶどう酒、アーモンドなどを Coventry に持ち帰った。染色工の William Peyer はこの年112balets の大青、5 bales のあかね染料、3 tun のオイルを扱った。²⁴⁾ 大青は Southampton からだけでなく Bristol から運ばれていた。

布張り場 (tenter ground) は毛織物製造にとって欠かせないものであり、1420年に年 46s. 8p. もの賃貸料が布張り場に支払われたことはこの時期 Coventry において毛織物工業が極めて繁栄したことを物語っている。²⁵⁾

注

- 1) E. M. Carus-Wilson and O. P. Coleman, *England's Export Trade 1275-1547* (Oxford, 1963): イングランドの羊毛輸出量は1305-1309年に平均41,313sacks を記録したが、1364-1368年には平均27,8746sacks とほぼ1/2に低落した。; *The Statutes of the Realm*, vol. I, p. 332: Ordinance of the Staple, 1353
- 2) P. R. Coss, op. cit., p. xxxix; Roger le Chamberlain は1268年に Henry II 世の特許状の追認を Peter Baron と2人で買った。C. P. R., 1272-81, p. 149
- 3) Agnes は自らも羊毛取引に携わり、1327・1332年に Subsidy をそれぞれ10s.・16s. 8p. 支払った。彼女は Trinityギルドの会員であり、1323年に St. Michael 教会に祈願所を設置した。C. P. R., 1338-40, p. 289; R. A. Pelham, *The Early Wool Trade in Warwickshire and the Rise of the Merchant Middle Class*, Birmingham Archaeological Society Transactions and Proceedings, vol., LXIII, 1944, p. 51
- 4) 羊毛商人の集会は羊毛ステーブルの設置やその場所の選定などを討議するために開かれた。例えば、E. Power, *Medieval English Wool Trade* (London, 1949) pp. 67, 68, 69: Hamo Totyng は1303年に London から羊毛を輸出した。R. A. Pelham, op. cit., p. 41, 42
- 5) J. C. Davies, *An Assembly of Wool Merchants in 1322*, E. H. R., vol., XXXI, p. 603
- 6) R. A. Pelham, *ibid.*, pp. 44, 45
- 7) E. Power, op. cit., p. 83; R. A. Pelham, *ibid.*, p. 46
- 8) R. A. Pelham, *ibid.*, p. 48; C. C. R., 1323-7, p. 594; C. C. R., 1343-6, p. 464; C. C. R., 1349-54, p. 441; Richard Stoke は1343年 St. John the Baptis ギルドの創設者の1人。C. P. R., 1343-5, p. 40; Flanders と Coventry の関係は古く、すでに13世紀初頭には Amiens, Flanders の人々が Coventry に住んでいた。Hugh de Arraz は、Geoffrey the Goldmith の娘 Alice と結婚し Coventry に住んだ Flanders の商人であった。P. R. Coss, op. cit., p. 194
- 9) M. Domer Harris, *The Register of the Guild of the Holy Trinity, St. Mary St. John the Baptist and St. Katherine of Coventry*, p. 16, n. 11, p. 42: 以下 *The Register* と略記: Johannes Pykeryng の他に the Church of the Blessed Mary of Calais の修道院長 Willelmus Grene が会員の中にいた。The Register, pp. 41, 93, 110
- 10) その他、Henry Clerke は1358・64・72年、Richard de Stoke は1357・61・67年に市長を勤めた羊毛商人であった。

- 11) Adam は1347年, William は1356年に羊毛商人の集會に招集された。Botoner 家の一員 John は1372年に London から羊毛輸出の許可を与えられた。R. A. Pelham, *op. cit.*, p.
- 12) 彼は Coventry で最も富裕な商人であり, 1327年には Subsidy £2 10s. を支払った。Robert は彼の父親。R. A. Pelham, *op. cit.*, p. 49; C. C. R., 1323-7, p. 594; C. C. R., 1327-30, pp. 192, 496
- 13) Botoner 家は, 15世紀初めに Withibroke で土地を購入し地主の仲間入りをした。John Onley は1400年に Calais の市長を勤めていた。John de Papenham は1369・76・77年に市長を勤めた羊毛商人で, 70年代にはアイルランドの毛織物を扱っていた。また, Robert Shepey は1338年に London から羊毛を輸出していたが, 1354年に毛織物検査官 (Aulnager) に指名された。C. P. R., 1374-77, p. 28; C. P. R., 1350-53, p. 535
- 14) W. F. Carter, *The Lay Subsidy Roll for Warwickshire of Edw. III (1332)*, published for the Dugdale Society, 1926: 1332年の Subsidy の支払者と金額は Coventry が135人・47 2s. 1/2d. Warwick が92人・17 16s., Birmingham が69人・9 1s 4d., Stratford-upon-Avon が53人・12 7s. であった。1334年の Lay Subsidy では Coventry は1,000s. を課された。この年 Bristol・York はそれぞれ4,400・3,240s. であった。; W. G. Hoskins, *Provincial England*, 1963, p. 238
- 15) R. A. Pelham, *The Cloth Markets of Warwickshier during the later Middle Ages*, B. A. S. T. P., vol. LXVI, 1950, pp. 135-141
- 16) John Onley 前出; Richard Doddenhal は1383年の市長: Leet Book, p. 5; The Register, p. 58; Leet Book, pp. 21, 63, 70, 73, 187, 246; Roger Benet は Warwickshier の毛織物検査官で, Worcester で取引していた。C. P. R., 1391-6, p. 400
- 17) C. P. R., 1391-6, pp. 627, 628, 630, 598; William Hapesford は, Trinityギルドの会員で Smithford 通りに住んでいた。C. P. R., 1391-96, p. 626; The Register, pp. 82, 87; Leet Book, pp. 80, 89, 127, 155; A. Beardwood, *The Statute Merchant Roll of Coventry 1392-1416*, pp. 10, 11, 25 (London, 1939): 以下 S. M. R. と略記
- 18) この時期 Warwickshier には Alcester, Coleshill, Henley-in-Arden, Solihul, Birmingham, Stratford-upon-Avon の9か所に毛織物市場があった。
- 19) すでに13世紀初め Coventry で毛織物が販売されていた。P. R. Coss, *op. cit.*, pp. 48, 52; The Register, p. XVI; Leet Book, pp. 100, 104
- 20) Leet Book, pp. 246-252
- 21) Leet Book, p. 438; Combe, Stoneleigh, Merevale の僧院長は Trinityギルドの会員であった。The Register, pp. 29, 70, 106; C. P. R., 1361-4, p. 526; C. P. R., 1364-8, p. 198
- 22) The Cotswold は15世紀における上質羊毛の最大の供給源であった。例えば, E. Power, *op. cit.*, pp. 22, 23; The Register, p. 84
- 23) P. R. Coss, *op. cit.*, p. 51
- 24) B. D. M. Bunyard, *The Brokage Book of Southampton 1439-40*, publication of the Southampton Record Society, (Southampton, 1941): William Pere は1462年に市長, 1443年に執行役を勤めた。B. D. M. Bunyard, *ibid.*, pp. 5, 56, 68, 145, 152, 153, 155, 160, 163; Leet Book, pp. 202, 247, 320; その他, 毛織物商 John Goolde, Richard Clerk, 染色工 Gerveys Cole, 絹物商 Roger Kostantyne らがこの取引に携わっていた。Leet Book, pp. 202, 231, 247, 280; The Register, p. 47
- 25) V. C. H., *Warwick*, vol. II, p. 253

(四)

Coventry をはじめとして, 周辺あるいは遠隔地から集められた毛織物は London, Bristol,

Boston, Southampton などの主要貿易港を通じて海外に輸出され、それらの港からは Coventry や地方の人々のために様々な原材料や製品が持ち帰られた。中世後半以降の Coventry は毛織物工業の発展に伴って、局地的な市場圏の境界を遙かに越えたイングランド全域にわたる広汎な商品流通の拠点としての地位を確立していった。

すでに、12世紀半ばまでには北、東、南西、南東に延びる道路が Coventry を隣接地域に結び付け、14世紀の半ばまでに道路網は Worcester, Lichfield, Tamworth, Leicester 及び London に延び、おそくとも16世紀までには London から Coventry を経て駅馬車が Anglesey 島の西端 Holyhead に行った¹⁾。

このような地理的要因のほかに、この時期 Coventry の商業の発展を促進した様々な政治・経済・宗教的要因があった²⁾。

1334・44年に Coventry の商人およびその後継者たちは、「王国の全てを通じて彼らの商品に対する通行税、通橋税など関税の支払いを永久に免除する」との特許状を付与された。London は、1334・38年、1473年にこの特権に同意し、また1452・56年にはそれぞれ Nottingham・Southampton との間で通行税の免除を取り決めた。Bristol とは1493年に埠頭税をめぐる争いをおこしていたが、1500年に免除の同意がなされた³⁾。

Coventry では1340年からの24年間に、the Guild Merchant of St. Mary を始めとして the Guild of St. John the Baptist, the Guild of St. Katherine など5つのギルドが設立されていた。これらのギルドは1392年に the Corpus Christi Guild を除いて、「the Guild of the Holy Trinity, St. Mary, St. John the Baptist, and St. Katherine」として統合された。このギルドの規約のほとんどは宗教・慈善的な事項に関するもので商業的目的のギルドの基本的な組織については、「もし、彼の資力に従ってギルドに協力してきた会員が、自分自身の過失ではなく、災難によって貧困に陥った時、ギルドは貸付けに対して何も求めることなしに、彼が十分と考える期間取引し利益を得るために資金を貸与する」という規約を除いて、ほとんど述べられていない⁴⁾。しかし、このギルドは実質的に Coventry で唯一の商人ギルドであった。会員は若干の場合に純粹に宗教・政治的動機から入会したが、ほとんどの場合に経済的理由からであり、彼らはギルドに加入することによって会員との友好関係を確立し、より一層取引を広げることができた。会員は僧院長などの宗教関係者の他は圧倒的に商人・職人が多かったが、かなりの数の女性の会員も含まれていた。夫や息子と共に加入した2,128人を別にして女性の会員は300人を越え、そのなかにおそらく彼女ら自身取引に携わったと思われる99人の独身女性がいた⁵⁾。この Trinity ギルドや宗教・社会的性格を持つ Corpus Christy ギルドの繁栄は、市場中心地としての Coventry の発展を促進した。Corpus Christy の祝祭日に、同職組合の会員によって演じられた宗教劇の劇群 (Cycle) は当時人気を博しており、地方の多くの人々を引き付けた。これは Corpus Christy の歳市と同じ日であったので見物者を購入者にした。この2つのギルドの祝宴には近隣の Combe, Stoneleigh をはじめ、Worcestershier の Evesham, Pershore や Gloucester-

shier の Winchcombe, Tewksbury などの僧院長が招待され、彼らのほとんどがギルドに加入した。

手工業者の組合 (craft gild) も早くから発達しており、15世紀初めまでには23の職人組合が存在した。1406年に市長と執行役は、それ以上いかなるギルドの設立をも禁止するとの勅許状を得ていた⁶⁾。洋服仕立商と縮絨工のギルドは1384年に設立された the Nativity of Christ ギルドに起源をもち、1439年に洋服仕立商と縮絨工はこのギルドの会員として記述された⁷⁾。この時、ギルドを統治する4人の親方を選出する権利、印章、そして10marksの価値の土地を持つ権利を与えられた。その後、1448年にこのギルドは縮絨工の希望で別々のギルドに再編成された。染色工は海外貿易と密接に結び付いていたので、はじめ彼ら自身のギルドを形成するよりも商人ギルドに加入することを望んだ。しかし、1475年までには彼ら自身のギルドを設立していた⁸⁾。

1345年1月20日付で Coventry は1つの特許状を付与された。これには次の条項が含まれた。「前述 (Coventry) の人々と住民及び、その都市を訪れる商人達の取引を保証するために、そこに国王の印璽を保管し商人法の形式に従って通常行なわれているように、そこでの負債の承諾書を2通とることを定めるよう命ずる」⁹⁾。この条項により、Coventry で商人法に基づく法廷が開かれることとなり、そこで負債の承諾書が作成された。債務証書はラテン語で書かれ、書式の多くは「Aの日に、商人法に基づく市長と書記の前で債務者Bが債権者Cに金額Dの債務を認めた。それはEの日にFの場所で返済する」となっている。この法廷開催の便宜は Coventry にあらゆる地域から、あらゆる職種の人々をもたらした。

本項および次項では「Trinityギルドの会員登録簿」、「The Statute Merchant Roll of Coventry」、および「開封勅書登録簿」(Calender of the Patent Rolls)によって、この時期の Coventry の発展を商業的側面から明らかにする。Trinityギルドの会員登録簿は、ほぼ1340年から1450年にわたるもので多くの場合に会員の出身地、職業が記入されている。また「The Statute Merchant Roll of Coventry」は、1345年の特許状に基づいて作成された債務証書の記録の一部で1392年から1416年のものが収められている。

Coventry 近隣、および Warwickshier 内の都市、農村の多くの人々が Trinityギルドに加入、もしくは取引のために Coventry を訪れた。彼らはその生産物、おそらく羊毛を、又は家庭で織った毛織物を、そして穀物、家畜、野菜、皮革などを Coventry に運びそれを市場で販売し、生活資材を始め毛織物製造に必要な原材料、そして珍しい商品やサービスを入手した。そうした人々の中には Coleshil の毛織物商や剪毛工、Benkeswell の織布工らがいた。14世紀末から15世紀初頭に Napton-on-the-Hill の John Broune は Coventry で毛織物を販売していた。その毛織物商の息子 Robertus Atkyns は Trinityギルドの会員であった¹⁰⁾。14世紀末 Solihull の John Wodard が Coventry の鞍作り師と、15世紀初頭 Kelyngworth の絹物商が Coventry の絹物商と取引していた¹¹⁾。Stratford-upon-Avon の the Holy Cross and St. John the Baptist ギルドの組合長であった Johannes Mayel が Trinityギルドの会員の中にいた。この Holy Cross ギルドには60

人を越す Coventry の人々が加入していた。¹²⁾ Warwick や Birmingham の多くの人々もこの時期 Coventry で取引に携わっていた。Warwick の染色工 Willelmum de Bedeford が15世紀初め Coventry で取引していた。そして Birmingham の John Traford は Coventry の染色工と、Ricardus Hale, Simon Hold はそれぞれ Coventry の白ろう細工師、鍛冶屋と取引があった。¹³⁾ この時期 Coventry では毛織物工業の他鉄工業も盛んであった。その他 Forshaw Heath, Nuneaton, Bulkington などからの人々も Coventry で取引に関わっていた。

Warwickshier 近隣の諸州, Leicester, Stafford, Worcester, Oxford, Northampton などからの人々も多かった。Leicestershier の Leicester, Merket Harborough, Letterworth, Hinckley などからはほぼ15人がギルドに入会していた。Redundant の洋服仕立て商 Ricardus Asshedon も会員の1人であった。North Kilworth, Hinckley の人々が Coventry で Warwickshier の Attleborough の Willelmus Raynald と、Nottingham の Iohanni Promtre が Coventry の魚商や毛織物商と取引していた。¹⁴⁾ Nottingham のすぐ外れの Wallaton の Willoughby 家は Coventry と緊密な取引関係があり、彼らにとって Coventry はオレンジ、アーモンド、プルーン、ざくろ、アニスの実、甘草、白こしょう、砂糖、石鹼といった商品の入手に欠かせない市場であった。¹⁵⁾ Staffordshier からは Stafford を始め Stoke on Trent, Penkridge, Finchespath などの人々がギルドに入会した。そして、Brineton, Weston-under-Lizard, Blymhill などの人々が14世紀末 Coventry のメリヤス製造工 Willelmo Palmere に60li の借金をしていた。Coventry のしろめ細工師は Lichfield の Ricardum Halys に借金があった。15世紀半ば Burton-on-Trent の羊毛仲買商 (woolmonger) は Coventry の絹物商に 5 marks の負債があった。Worcestershier からは Worcester, Bredon, Clent Droitwich などの人々がギルドに入会した。Evesham からの会員は11人を数えた。Kidderminster の Iohanni Draper は Coventry のメリヤス製造工 Iohannes atte Wode にお金を貸していた。¹⁶⁾ Oxfordshier からは Johnnes Kyngesmylne らがギルドに入会した。Banbury の刷毛具製造工らは Coventry の鍛冶屋に借金があった。15世紀初頭 Coventry の絹物商に12li 17s. の負債があった Isabel Leukemore は Oxford からの移住者であった。また Oxford 近くの Woodstock の毛織物商は Coventry の毛織物商 Thomas Mosell に 6 li を越える負債があった。¹⁷⁾ Northamptonshier からの入会者も多かった。Abington の Johnnes Grene は会員の1人であった。Braunston の Robertus Goddesson が14世紀末 Coventry で取引していたし、Thornby の羊毛仲買商 Ralph Conquere は Coventry の毛織物商にかなりの負債があった。¹⁸⁾

Coventry は周辺地域の市場中心地として機能し、毛織物関係をはじめ様々な職種の人々が取引のために Coventry を訪れていた。

注

1) V. C. H., Warwick, vol. VIII, p. 1

2) 1355年3者間証書によって2つの halves の間の長年にわたる闘争に終止符が打たれた。さらに1451年に2つの halves は正式に統合され、the County of the City として法人格を付与された。これ

- は Coventry の政治・経済の発展に広範な影響を及ぼした。L. Fox, *Coventry Guilds and Trading Companies*, B. A. S. T. P., vol. 78, 1962 pp. 13, 14; *Leet Book*, pp. 749, 753
- 3) *Leet Book*, pp. 302, 599, 600; *Calender of Letter Books*, City of London, E, pp. 267, 268; F, pp. 23, 24; L, p. 113; H. S. Cobb, *The Local Port Book of Southampton for 1439-40*, p. XXVII (Southampton, 1961)
 - 4) J. T. Smith, *English Gilds*, pp. 226, 232, 234 (London, 1870); G. C. Gross, *The Gild Merchant*, vol. II, pp. 48, 49, 50, 51 (Oxford, 1890); L. Fox, op. cit., p. 17
 - 5) *The Register*, pp. 2, 3, 4, 6, 14 など：その他彼女ら自身の権利においてギルドに加入し、取引に従事した女性、例えば Johanna, wife of William Peuterer らが114人、未亡人、例えば Adam Botoner の妻であった Alice らが37人いた。*The Register*, pp. 2, 36, 39, 41: 女性の会員の1人 John Russell の妻 Margery は £800 にのぼる商品をスペインの商人らによって略奪され、1413年にそれを埋め合わせるためスペイン商人の商品を押収する許可を与えられた。*The Register*, p. 27; C. P. R., 1413-16, pp. 17, 18
 - 6) C. P. R., 1405-8, p. 274
 - 7) C. P. R., 1381-5, p. 409
 - 8) *Leet Book*, p. 418
 - 9) S. M. R., p. VII
 - 10) R. A. Pelham, *The Cloth Market.*, p. 138; *The Register*, p. 60
 - 11) C. P. R., 1391-6, p. 681; C. P. R., 1429-36, p. 7
 - 12) *The Register*, p. 41; J. H. Bloom, *The Guild Register Stratford upon Avon, 1406-1535* (London, 1907)
 - 13) S. M. R., pp. 36, 40, 58
 - 14) *The Register*, p. 61; S. M. R., pp. 44, 73
 - 15) C. Phythian-Adams, *Desolation of a City, Coventry and the Urban Crisis of the Late Middle Age* (1979) p. 29
 - 16) S. M. R., pp. 1, 22; *The Register*, p. 86; C. P. R., 1461-67, p. 505
 - 17) S. M. R., p. 38; C. P. R., 1422-29, p. 248; C. P. R., 1494-1509, p. 297; *Leet Book*, p. 601
 - 18) *The Register*, p. 39; S. M. R., p. 13; C. P. R., 1416-22, p. 225

(五)

Dee 河口に位置する Chester は Coventry をアイルランドと結び付けた。Chester を通じて Coventry の毛織物がアイルランドに送られ、アイルランドの木材、魚、品質の劣った毛織物や皮革が Coventry にもたらされた。Chester から Trinityギルドに加入した者は、Henricus Baker ら25人にのぼった。14世紀末 Chester の Hugo Erl が Coventry の洋服仕立商 Iohanni de Oxenford と取引していた¹⁾。アイルランドの多くの人々もギルドに入会し、Coventry との間に活発な貿易活動を行なった。14世紀末 Dublin の Thomas Cawode は、Coventry の羊毛商人 Iohanni Onley にかんりの額の借金をした。Simonem de Dodenhale も Coventry で取引していた Dublin の商人であった²⁾。この時期 Coventry には洋服仕立商の Thomas Pynkeston, 肉屋の Stephen Kildale ら多くのアイルランド生れの人々が住んでいた。また毛織物商 John Preston,

絹物商 John Tate ら多くの Coventry 商人がアイルランドに代理人を置き貿易に携わっていた。³⁾

西部の貿易中心地 Bristol との関係も極めて密接で、Bristol の指導的な市民を含む30人を越える人々がギルドに入会していた。会員の 1 人 Walterus Derby は、1368/9, 1376/7, 1380/1, 1384/5 年に Bristol の市長を勤めた貿易商人で、船主でもあった。また会員の中には市長、執行役を勤めた貿易商人と同一人物であったと思われる Willelmus Kannyngges, Elyas Spylly の名前がみられる。1400年の秋にスペイン人によって7隻の Bristol 船舶が拿捕された時、その中に Johannes Clyffe の商品が含まれていた。彼も Trinityギルドの会員であった。⁴⁾ Bristol からフランス産ブドー酒、香辛料、大青、みょうばん、オイル、鉄などが Coventry にもたらされた。⁵⁾ 1451年に Coventry がバラ戦争に備えて大砲 serpentynes を購入したのは Bristol の鋳物工場からであった。⁶⁾ Coventry の毛織物は Bristol からポルトガルやアイルランドに輸出され、1390/1年に1隻の Coventry 所有の船舶がイングランド各地の7人の商人の毛織物を積んで Bristol からポルトガルに向かった。⁷⁾ Bristol は Chester とともにアイルランド向けの商品のもう1つのはけ口で、1393年に John Northfork はアイルランドに Bristol の Henry Lane を代理人として置いた。⁸⁾ Nottingham のアラバスター・パネルが Coventry を経由して Bristol へ送られ、それは Bristol を始めアイルランドからポルトガルまで多くの教会の祭壇を飾った。⁹⁾

14世紀末 Bristol の Ricardus Bache は、Coventry で Guilsborough (Northants.), Coventry, Norton Lindsey (Warws.) の人々と取引し、3人に114li 10s. にのぼる借金をした。¹⁰⁾ この時期 Coventry の商人も Bristol を訪れ取引に携わっていた。羊毛仲買商 William Drue は Bristol 商人 Nicholas Longe らに、染色工 Ralph Bredon は John Janyns に Bristol で借金をしていた。¹¹⁾ 羊毛生産地 the Cotswold から Chipping Campden の Willelmus Grevel を始めとして多くの人々がギルドに加入していた。Willelmus Steuenes が Coventry で London の絹物商と取引していた。また Cirencester, Winchcombe からの会員もあり、15世紀始めに Cirencester の織布工は Coventry の William Kyng と、Winchcombe の Willelmus Kempe は Coventry の毛織物商と取引していた。¹²⁾ Gloucester から Johannes Recusby らがギルドに入会していた。Gloucester の東10miles にある Newent の Iohannes は、Coventry 近くの Stoke の Henrici Merington の息子で、Coventry の羊毛商人 Willelmo Dylcok に借金をしていた。また、Hertford の居酒屋商が Coventry のブドー酒商 Peter de la Mare に借金をしていた。¹³⁾

南西部の Cornwall, Devon の毛織物はおそくとも14世紀半ばまでには Coventry で販売されており、Somersetshire の毛織物都市 Taunton の Iohannes Peddyng, Iohanni Stowy が Coventry で取引していた。

南部の Southampton との取引は、前項でみたように極めて活発であったが、Southampton からのギルド入会者はいなかった。Salisbury, Devizes, Melksham など Wiltshier からの会員は多く、Coventry の商人が Salisbury の毛織物商 William Predy に借金をしていた。Berkshier のかつての毛織物工業の中心地 East Hendred から Johannes Bullok がギルドに加入していた。¹⁴⁾

東部の Wash 湾諸港 Boston, King's Lynn を通じて Coventry の毛織物や羊毛がバルチック海・アイスランド方面に送られ、魚やバルチック製品が Coventry に運ばれた。1430年以降の記録に Coventry 商人の船舶の毛織物が Boston で没収されたとの記述がある。Coventry の魚商 John Battere が Boston の商人と取引していたし、Thomas Napton は毛織物や他の製品と引き換えにアイスランドから魚を持ち帰った。¹⁵⁾ Boston は Calais へ羊毛を積み出した重要な港でもあった。King's Lynn, Boston から Thomas Beram, Willelmus de Burneham らがギルドに入会していた。Boston の Iohannes Pole, Iohannes Abraham, Reginaldus Rede らは Coventry で取引に携わっていた。¹⁶⁾ イーストアングリアの Norfolk や Suffolk からの会員も多く、15世紀初め Norwich の刷毛具製造工 Roger Knyte は Coventry の毛織物商 John Rreston らに 9 li の負債があった。また、Coventry の商人が Norwich で絹物商に借金していた。魚は London やアイスランドばかりでなく Great Yarmouth から直接もたらされ、ギルドの会員の中に Great Yarmouth の漁商 Ricardus de zarnemouth がいた。Great Yarmouth はにしん漁で有名であった。大歳市の1つとして知られた Huntingdonshire の St. Ives の毛織物商が会員の中にいた。¹⁷⁾

Carlisle を始めとして北部からも多くの人々が Coventry を訪れていた。Carlisle からのギルド加入者は Edmundus Waterford ら12名にのぼり、Willelmus Cook は Trinityギルドの設立者の1人であった Henrico Keel に借金があった。Kendal から Johannes Colyneson ら2人、Newcastle-upon-Tyne から Iohannes Wych ら8人、York から毛織物商や織布工ら3人がギルドに加入していた。Hull の絹物商 Johannes Hornby も会員の1人であった。¹⁸⁾ この時期 Newcastle-upon-Tyne から品質の劣った羊毛が大陸に輸出されていた。Newcastle-upon-Tyne のろうそく商、York 市民 Iohanni Wrabby, Scardeburgh の Thomas Peke が Coventry で絹物商や毛織物商らと取引していた。そして15世紀中頃 Richmond の刷毛具製造工は Coventry の毛織物商 Richard Sharpe に40s., Tykhull の商人は Coventry の毛織物商 John Parker に6 li の負債があった。¹⁹⁾

14世紀初頭以来、絶え間のない拡大を示し、全ての地方都市の上に遙かにそびえ立っていた London とはとりわけ緊密な結び付きがあった。1309年に Rovert Nadlere が5 s. で London 市民権を購ったように Coventry から London に出た者も多く、London に住んだ毛織物商 Edmund Wode, 羊毛商人 Henry Kebull は、おそらく Coventry の人であった。Coventry の毛織物商、絹物商、食料雑貨商、金細工匠ら極めて多くの人々が London で取引していた。²⁰⁾ Coventry の羊毛、毛織物の主要な輸出港は London であり、Coventry と London の間の荷車輸送が定期的に行なわれていた。London の商人達も頻繁に Coventry を訪れ取引に従事していた。London の商人たちは、自ら、又はその代理人、そして彼らの所属する夫々のギルドの地方の会員を通じて、あらゆる地方の市場で取引をしていた。ある食料雑貨商が Salisbury, Guildford, Newbury, Bristol, Northampton, Reding, Oxford, Gloucester で果物、ぶどう酒、染料を販売したように Coventry へもそうした輸入品をもたらした。すでに、13世紀前半 London の

William de Wikewan は Coventry でぶどう酒を販売していた。Coventry での取引に加わった John Pultney は、London 市長を 4 期勤めた毛織物商で、彼の母親はこの地方の出であった。彼は 1342 年に Coventry から London に通ずる道路の市門近くの場所に White Friars の教会を建立した。その教会の修道士席には Adam Francis ら多くの London 市長の紋章が彫られている。また、Coventry Cross を建てたことで知られる商人 William Holys, 聖メアリー教会のステンドグラスにその紋章が飾られている Ricardus Whytington, その他 Simon ffraunceys, 絹物商 Robertus Large, Henricus ffrowyk ら London 市長となった人々を始め、70 名近い人々がギルドに加入していた。²¹⁾ その中には、食料雑貨商、絹物商、宝石商、手袋製造職人、剪毛工、革帯職人など種々の職種の人々が含まれていた。ブドウ酒商 Andreo de Preston は Coventry の居酒屋の主人と、絹物商 Iohnni Whyte は Iohannes Power と、食料雑貨商 Iohnnes Stapulford は しんちゅう細工師 Thomas Talbot と Coventry で取引していた。彼らはギルドの会員でもあった。²²⁾

こうしてイングランド各地から Coventry を訪れた人々は、「the Statute Merchant Roll」に記述されただけでも 22 の州におよんだ。彼らは Coventry で地元の人々とばかりでなく各地から訪れた人々とも取引した。Staffordshier の West Bromwich, Lincolnshier からの人々が、London のぶどう酒商, Buckinghamshier, Huntingdonshire からの人々との間に交わした債務証書は、この時期 Coventry がまさにイングランドの取引中心地であったことを物語っている。²³⁾

注

- 1) The Register, pp. 13, 26, 28, 34; S. M. R., p. 2
- 2) S. M. R., pp. 9, 21
- 3) Thomas Pynkeston は 1399/00 年に毛織物を扱っていた。その他アイルランド出身者に洋服仕立商 Edmund Wyseman, Adam Coule, パン屋 Walter Longe らがいた。C. P. R., 1391-96, pp. 453-465; John Preston は 1399/00 年に毛織物を扱っていた。C. P. R., 1391-96, pp. 261, 278, 404, 450, 623; その他毛織物 John de Garton, William Swetenham は 1397/98 年に毛織物を扱っていた。C. P. R., 1401-5, pp. 377, 384, 458
- 4) The Register, pp. 11, 12, 88; E. M. Carus-Wilson, The Overseas Trade of Bristol in the Later Middle Ages, Bristol Record Society's Publications, vol. VII, 1937, pp. 34, 35, 298, 299, 300, 301, 302, 303 以下 Overseas Trade of Bristol と略記
- 5) 例えば E. M. Carus-Wilson, op. cit., p. 5
- 6) Leet Book, p. 260
- 7) Overseas Trade of Bristol, p. 193
- 8) C. P. R., 1391-96, p. 277
- 9) Leet Book, pp. 549, 550
- 10) S. M. R., p. 3
- 11) C. P. R., 1391-96, p. 678; C. P. R., 1408-13, p. 332; C. P. R., 1461-67, p. 258; The Register, pp. 39, 89
- 12) S. M. R., pp. 39, 40, 41; The Register, pp. 9, 100
- 13) The Register, pp. 34, 40; C. P. R., 1416-22, p. 357; S. M. R., p. 30

- 14) The Register, pp. 35, 36, 45, 58; C. P. R., 1436–41, p. 462; Leet Book, pp. 213, 242
- 15) E. M. Carus–Wilson, op. cit., p. 258; Overseas Trade of Bristol, pp. 121, 130; C. P. R., 1435–41, p. 214; E. Power and M. M. Postan, op. cit., pp. 169, 174
- 16) The Register, pp. 32, 79, 85, 86; S. M. R., pp. 12, 20, 23, 31
- 17) C. P. R., 1416–22, p. 25; C. P. R., 1436–41, p. 216; The Register, pp. 6, 8, 28, 41, 63, 81
- 18) The Register, pp. 7, 11, 14, 35, 37, 41, 44, 45, 67, 91; S. M. R., p. 38
- 19) C. P. R., 1416–22, p. 344; C. P. R., 1422–29, p. 245; C. P. R., 1441–46, p. 16; S. M. R., p. 38; Richard Sharpe は1450年の市長: Leet Book, pp. 242, 246, 252
- 20) Calender of Letter Books, City of London, D, p. 38; C. P. R., 1408–13, p. 338; C. P. R., 1422–29, pp. 373, 435; C. P. R., 1429–36, pp. 15, 233; C. P. R., 1436–41, p. 115
- 21) P. R. Coss, op. cit., p. 49; S. M. R., p. 65; The Register, pp. 68, 70, 93; William Holys の息子 John と Thomas もギルドに加入した。The Register, pp. 105, 109;
- 22) S. M. R., pp. 2, 22, 35, 40
- 23) S. M. R., p. 74: 国内ばかりでなく、この時期海外からも Coventry を訪れ、取引に携わった人々がいる。The Register, pp. 8, 58; S. M. R., p. 58

(六)

中世後半における Coventry は、地方の首都である York, Bristol などと同様に富裕かつ大規模な都市に成長し、1377年に約7,000人であった人口は、1433年にはほぼ3,000人増の10,000人となったと推定されている¹⁾。この時期が Coventry の繁栄の頂点であり、その後チューダー期に入って、14世紀後半からの拡大を支えた毛織物工業と商業が不振に陥り、16世紀20年代にはまさに「崩壊」の危機に瀕していた。

15世紀後半、毛織物工業が次第に農村に移行する傾向は Coventry においても例外ではなく、16世紀初め農村の毛織物工業との競争に直面し、1518年には織元が農村で毛織物を織らせたり、縮絨するための毛織物を農村に持っていくことを禁止するなど様々な規制を設けた。しかし、こうした規制にもかかわらず農村への流れを押し止めることはできなかった²⁾。また、15世紀半ばからの30年間イングランドの毛織物貿易は不振に陥っており、特に Bristol の対仏貿易、東部諸港の対バルト海貿易は急減していた³⁾。そして、Coventry の毛織物工業にとって不可欠である染料の主要な供給地であった Southampton への Genoese からのみょうばん、Toulouse からの大青の供給は、それぞれ60, 70年代に枯渇していた⁴⁾。中世後半の道路網の急速な変化により、それまで Coventry に持ち込まれていた商品は周辺の都市に直接持ち込まれるようになった。この事態は、これまで港や航行可能な河川を持たず大半を道路網に依存しながら発展していた Coventry にとって深刻なものであった。

またバラ戦争による防御施設、武具、兵士などの費用の増大は Coventry の財政をむしばむと同時に国内取引の混乱を招いた。さらに市内だけでも3,300人の死者を出したといわれる15世紀70年代のペストを初めとする断続的な疫病の流行は飢饉を招き、市場活動を停止させた。

このような戦乱と疫病は Coventry の衰退を一層深刻なものとした。16世紀20年代初めのペストと食糧危機は14世紀以来最悪のもので、1520年に6,601人であった人口は3年後には5,700人に減少し、その結果全家屋の1/4にあたる565軒が空家になったといわれている⁵⁾

1549年 Thomas Smith 卿は「blue thread を製造していた当時の Coventry は富裕であったが、現在では blue thread は全て海外から輸入されるようになったため産業が衰退し、それにとともなって都市も衰退していったということを耳にした」と証言している⁶⁾

注

- 1) W. G. Hoskins, op. cit., p. 238: 1377年の人頭税支払い者は、York の7,248人、Bristol の6,345人に次いで Coventry は地方都市の中で3番目の4,817人であった。また、1434年国王に贈物をした時に出資した人は1,228人であった。これから当時の Coventry の人口は9,824人と推定される。Leet Book, pp. 674, 675
- 2) Leet Book, pp. 639, 640, 656-61, 16世紀初めに Coventry では帽子産業が発展していたが、毛織物工業の衰退を埋め合わせることはできなかった。Leet Book, pp. 574, 641, 708
- 3) 例えば、E. M. Carus-Willson and O. Colman, op. cit.
- 4) Southampton からの大青は、1477/78年以降 Coventry にもたらされなくなった。B. D. M. Bunyard, op. cit.; D. B. Quinn, Port Book of Southampton, 1477-81, P. S. R. S., no. 38 (1938)
- 5) Leet Book, pp. 674, 675; V. C. H. Warwick, vol. vii, pp. 4, 5
- 6) M. Dewar, A Discourse of the Commonweal of this Realm of England: Attributed to Sir Thomas Smith, The Folger Shakespeare Library (1969) p. 124